

Title	香港中国人の宗教思想の一端について
Sub Title	Note on the Chinese faith in Hong Kong
Author	可児, 弘明(Kani, Hiroaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1967
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.40, No.2/3 (1967. 11) ,p.119(281)- 134(296)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本信廣先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0123">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19671100-0123</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 香港中国人の宗教思想の一端について

可 児 弘 明

香港はもと広東省の一部であり、一八四二年南京条約による割譲地（香港島）、一八六一年北京条約による割譲地（九竜）、一八九八年の租借条約による租借地（新九竜、新界）からなり、政治的には植民地省直轄下におかれた英国の王領植民地である。しかし、政治面をはなれてみると、地理的にも、民族的にも、そして基本的な文化の上からしても、香港は事実上、中国の一部に外ならないことが強く感じられる。もとより、新界のいかなる村落に行つてみても、近代化——西欧化の影響は明瞭に認められるが、言語、衣食住などの日常生活、家族、社会制度など、諸方面において、伝統的中国の慣習がいぜんとして保守されていることを否定できない。

一九六一年センサスによると、五才以上の住民に関する常用語調査は、英語一・二%、中国語九八・一七%という比率を示している。しかし公用語である英語は、第二言語として広く中国人間に普及しており、その水準も日本の諸都市とは比較にならぬほど高い。九竜、油麻地の雲南街には、タイプ・ライターを並べた英文代書屋が集団で営業しているほど英語が必要とされているのである。こうした環境に多年置かれたにもかかわらず、中国語の純潔がよく保たれているのは驚くべきほどである。これを中国語中の外来語によつてみると、まず個有名詞（例、加<sup>カナ</sup>大<sup>ダイ</sup>）を除き、外国語音をそのまま漢字によつて写す音訳は甚だすくない。日常、目につくのは、

A、咖啡<sup>コヒー</sup>、可可<sup>ココ</sup>、可口可樂<sup>ココラ</sup>、百事可樂<sup>ペプシ</sup>、的士<sup>シタ</sup>、士多<sup>スト</sup>、巴士<sup>バス</sup>、兵兵<sup>ピン</sup>、沙發<sup>ソファ</sup>、雷達<sup>レイ</sup>、法

西斯フアシ、摩登モダ、引擎エン、維也命ヒタ、模特兒モデ、沙龍サロ

B、白蘭地酒ブラン、威士忌酒ウイスキー、香寶酒シャンペン、加里飯カレーライス、撒丁魚サーデー、士多比利菓ベス

などであり、こうした外来語は、英語を習つたことのない中国人も理解するが、語数としては僅かである。さらに、熱狗ホット、白宮ホワイトハウスなど、意識に至つては微々たるものである。

結局、外来事物は、新しく造語して呼ぶ例が一番多いわけであり、

打字机タイプライター、写字楼オフィス、火箭ロケット、太空船宇宙船、電櫃冷蔵庫、電視テレビ、照像机カメラ、汽車オートモビル、火車ムラ、麵飽パン、餅乾ビスケット

など、枚挙にいとまない。この点、外国語音をそのまま写した外来語が氾濫する日本と、大いに性格を異にする。この相違は、反切という標音方式に頼つてきた中国と、表音文字である仮名の力を借りる日本との言語上の差であるばかりでなく、むしろ根本的な、両国民の外来文化受容の態度に帰結するのではないか、と思われてならない。善し悪しにかかわらず、東洋最古の歴史と文化、さらに中華思想を背影に背負う一種の保守性が、脈々としてうけつがれているのが感じられるのである。

宗教思想についても、国際的な自由商港であることからキリスト教、回教、ヒンズー教をはじめ各種の宗教がみられ、また時代を反映して三合会、創価学会などの新興宗教が行われているが、より広く行われるのは、中国在来のそれである。その全貌をくまなく述べることは、筆者の能くなしうる所ではないが、ここでその一側面なりとも触れてみたい。なお香港の中国人といつても、その実、各地方の中国人が居住するので、正確には方言グループに即した観察が望ましいが、ヒンター・ランドの関係で、ここでは主に広東人や鶴佬、客家に関するものととどめる。

一般に広東人の宗教思想には、廟宇や神座に祀られた正神と、廟宇のない流浪の残神、それに迷信に関連した鬼とがあ

る。こうした様相が著しく示されるのは、やはり周年的な祭礼のリズムである。なかでも、長洲の太平清醮はこの觀察に好適であると考えられる。長洲はビクトリア港の西端から西南西約五マイルの海上にある小島であり、水産業を中心に、香港二百余の離島中もつとも開発されているにもかかわらず、中国的気分を発散させた島である。この島で、毎年農曆三月末または四月十日頃開壇する太平清醮は、鬼に一種の供犠を行う祭礼であるが、島上にある全廟宇の神像が、祭礼期間中一カ所に集結するので、手早く宗教事情を知ることができるのである。

広東人のいう鬼には、家鬼と野鬼との区別がある。前者は依泊する家があり、子孫、縁者が祀りを行うため安定した状態にあり、祀りを絶やさぬかぎり崇めることはない。後者は依泊する家も、祀つてくれる子孫もないので安定を欠き、人間に崇りやすいと信じられている。野鬼にも各種あるが、非命に死んだ冤鬼、すなわち広東語でいう幽鬼を祀るのが清醮である。元来、鬼を祀るのは華北でも華南でも農曆七月の年中行事に組み入れられているが、七月のそれが家々で個別に行うのに反し、清醮は島全体の祀りになつている。

祭礼の中心となるのは、島の守護神北帝を祀つた道教の寺院、玉虚宮である。祭礼中、玉虚宮と海岸との間にある康樂場に、戲棚、神棚、飽山棚とよぶ仮屋が建ち、祭幽の場となる。また人家には玄天上帝（北帝）の名入り提灯が軒に吊げられる。市街は、北社街、興隆街、中興街、新興街、大新街などに分かれているが、それぞれの街境には、花牌とよぶ慶祝アーチや、三角形の彩旗が建てられる。アーチには、玄天上帝建、太平清醮、合境平安の三句が入っている。

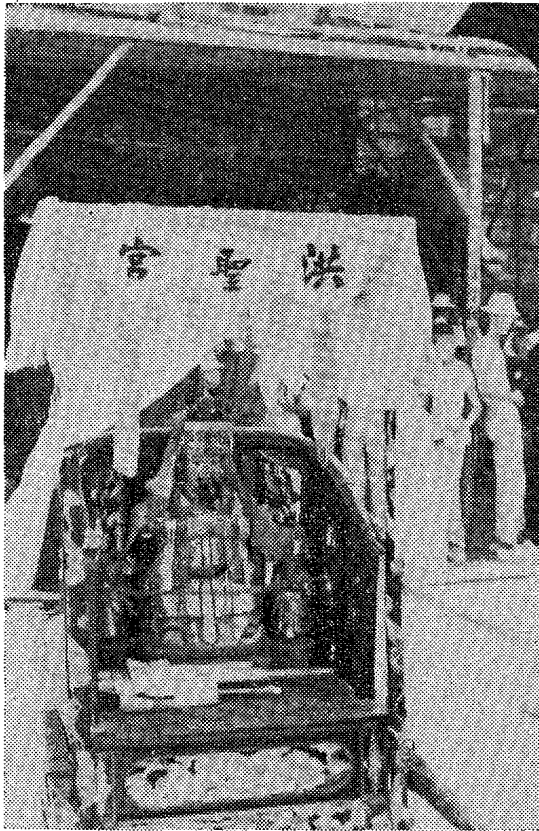
建醮に入ると全島民は齋戒に入るが、これを停屠茹素と称し、動物の屠殺と肉食、葷食が破戒となる。蠣の食用が齋戒から外されるが、理由は明らかでない。漁業も破戒になるので、船は投錨して灣を出ない。そして島民は戲棚に赴き、九竜や香港からきた潮劇、粵劇一座の芝居を見物する。香港の諸祭礼にはたいがい各地域集団単位で演劇が上演される。が、んらい神への奉獻を目的とし、廟前で三日三晩連続上演ということも珍らしくない。今日でも、農曆五月十三日布袋澳の

洪聖誕では奉獻の意義がよく看取される。同じことは人形劇や影絵劇についてもいえる。前者では郷村をまわり小銭を乞うて歩く者もある。端午に少年が吉辞を述べて家々を廻る習俗と共に、いづれ別の機会に紹介したいと思う。

もちろん神棚には、全廟宇の神像が安置され、一般の参詣と道士の祈禱がなされる。これらの神像は、太平山北帝、洪聖大王、西湾天后、中湾天后、南丞天后、環尾天后、觀音菩薩、北帝第二像としての玄天上帝である。いづれも衣冠を着け、神龕とよぶ木轎台に安置されて運ばれてくる(第一図)。

北帝は、玄天上帝、北方真武、天至大禘、などとも呼ばれ、香港で広く信仰される神であり、香港にすくなくも八廟あるほか、多くの道教寺院に神像が祀られている。神像は黒光りする顔をのぞかせているだけであるが、両眼を閉じ、口を結んだ莊嚴な感じにつくられている。この神は、商代に道教の始祖神元始天尊の命をうけ、地上で劫略をほしのままにしていた鬼王を征服し、その功により玄天上帝に封じられたともいうし、また夏の時に、堤防や排水によつて洪水制禦を行ひ、民衆に富利を授けた功により神格を与えられたものだともいう。ともあれその事蹟が北方より西南方に關係しているためか、華南での崇敬厚く、長洲では島の守護神になつてゐる。

洪聖大王は天氣の神であり、その来歴がはつきり知られないまま厚く崇敬を集めている神の一つである。このことは香港では稀でない。一説では南海竜王の再現であり、水界の妖怪を鎮める神であるという。別の説によると、唐代に広利知県をつとめた洪子という人物であり、天文、地文、数学に通



第一図 洪聖大王神龕 (長洲, 1966)

暁し、氣象觀測所をつくり、その的確な予報によつて、貿易業者や漁業者に益せしめたため、広利洪聖大王の諡号が与えられたのだともいう。ともあれ海上という不安定な世界に依存する船業者や漁業者から、海上の風雨を左右する天氣の神として敬まわれている。大嶼山から長洲、香港島南岸にかけての香港西南海域に約十廟の分布が認められ、また東海域にも洪聖大王の威力が及んでいる。香港には譚公という、これまた来歴の明確でない道教の正神があり、旧曆四月十日の譚公誕には、花牌や彩旗を飾つたジャンクが、譚公の神祠（花紙）を載せて筲箕灣の譚公廟に集まる。この神もまた片手一杯の豌豆を投げつけて干からびた穀物に雨をよび降らせ、いかなる狂暴な嵐をも鎮める靈力をもつと信じられており、氣象を左右する神として敬まわれている。しかし長洲では、この神は祀られていない。

天后は台湾でいう媽姐であつて、海難した時にこの女神に救いを求めると一命を全うするなど航海に靈驗あらたかだといわれ、貿易業者、船員、漁民の守護女神として盛んに崇拜される。伝説によると、宋初、福建莆田県賢良港の林家の女で、幼時より天賦の異禀を示し諸学を修めたが、それを書物の知識だけでなく、漁業、氣象、海難救助などに活用して郷党の利を計つたといわれる。また仏教と道教をも研めて法力を示し、草蓆に乗つて海に浮くなど奇蹟を示したという。六十余の諡号のうち、広東省では天后、娘媽、天上聖母が採用されている。香港では、天后廟が一番多く分布し、農曆三月二十三日の天后誕には、花牌で飾つたジャンクが廟宇に集まり、盛大をきわめる。

觀音については改めて述べるまでもあるまい。觀音菩薩が水陸において信仰されるように、天后や譚公は、海上だけでなく陸上により多くの信者を持つているのは事実である。しかし宗教がもし地域社会の性格を反映するものであるとすれば、島の産業や、外社会との交通がすべて海上に依存している長洲に、天后、洪聖、觀音信仰が強いことは、よくうなづくことができる。同様のことは香港全体にあてはめて考えることができる。香港にはなお閔帝、北帝、候王、竜母、車公、黄大仙などの諸廟をみるが、基本的には海洋的な正神崇拜の多いことが、その特色の一つとなつて<sup>(1)</sup>いる。



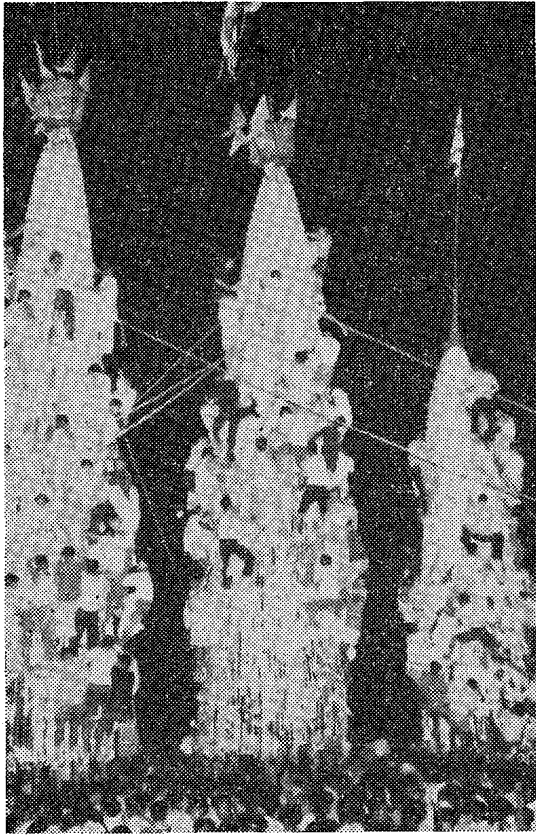
第二図 鬼王，土地公，山神（長洲，1966）

神棚内には、正神とともに、高さ三メートル余の、紙製の神が三座祀られている。中央に位し、長く白いあごひげを貯え、右手に杖をついたのが土地神である。香港では、土地公は尖つた石で象徴され、古いガジュマルの空洞や根本を祭壇に利用したり、また石敢当と一緒に祀られることが多いように思われる。右手黒ひげの武神は山神であり、これを鎮壇大將軍として祀り、左手の武神は大士王とよぶが、これは鬼王ということであるから、北帝の従者として祀るものと思われる。

建酬の呼物となるのは、菩薩遊行といつて、最終日に神棚内の神像が神龕にのつて市街を巡回し、それぞれの廟宇に帰るページェントである。神龕に生薑の根が赤糸で吊してあるが、これはその日までに新しく生まれた子供を神に報告するためだと聞いている。神龕の行列は、大燈籠、彩旗（旗幟）隊を加え色彩感に溢れるばかりでなく、鼓楽隊、大鑼鼓隊などのバンドを加えて賑やかである。更に大頭仔という道化に先導された一角獣（麒麟隊）と獅子（醒獅隊）の舞踊や、二十台近い飄色が続く。飄色というのは一種の出車であつて、輜台の上で、少年少女が中国史上の著名人物に扮し、人物にちなんだ故事、伝説、

逸話をあらわすのである。例えば、西施が越王勾踐と姑蘇台で相会している飄色や、少女二名が白蛇、青蛇に、少年が許仙に扮した「白蛇伝遊湖」の飄色である。そしてこれら少年少女は、たとえば少年が片手にもつ扇の上に少女が支えなしに立つなど、重力の法則を完全に否定している。もちろんこれには種々のトリックが工夫されているのであるが、その工夫が各街坊の民間に保存されている点に、大きな興味がある。こうしたパレードを広東語で出会とか会景巡遊と称している。会景巡遊は、広東省各地にあつた一種の慶祝儀式であり、伝統的な記念日とか公共的意義の大きい各種落成式典に行われた。香港の周年的会景巡遊としては、天后誕における元朗のそれと、太平清醮における長洲のそれが著名である。

清醮の最後は、飽山棚で行われる。ここには高さ十数メートルの飽山が三つ立てられる。各々円錐形の竹杵に紙を貼り、さらに表面全体を、布袋入りの菓子パンでおおつたものである。この三座を大飽山とよび、別に各街坊で数十座立てる小さなピラミッドを、小飽山とよぶ。いづれも幽鬼へ饗応するためのものである。最終日の深夜、道士が幽鬼を祀つた



第三図 大飽山 (長洲, 1966)

あと、島民は一斉に大飽山に殺到して、競争でよじ登る(第三図)。最頂部にある菓子パンを取つた人が、その年最大の富貴にあずかると信じられているからである。この搶飽山のあと、紙づくりの三神が焼却され、全行事が終了する。

長洲の清醮と称するものは大略以上のとおりであるが、この際付言しておきたいのは、掛けことばにみられる中国人の宗教思想である。飽山棚は孔雀のついた花牌で飾られている。いうまでもなく孔雀は、中国では吉鳥である。ところが街坊や戲棚の花牌は、蝶によつて守護されていることが多



い。蝶の広東音 *dip*<sup>0</sup> は八十才を意味する *dit*<sup>9</sup> に通ずるところから、長寿の願望を運んでくれると信じられているためである。譚公誕当日に使う紙の神祠や、農曆八月十五日中秋節の夜に蝶形の提灯を吊げ、あるいは蝶形の護符を身につけるのも、同じ理由による。この他、貓 *mao*<sup>1</sup> は九十才を意味する *mou*<sup>6</sup> に通ずる。植物にも例があり、歳末の花市でわが国の金柑に似た鉢植を買って各家で飾るが、これは広東音の橘 *swet*<sup>7</sup> が吉 *set*<sup>7</sup> に通じて縁起よしとされるからである。また枸櫞の果実、すなわち仏手 *Fet*<sup>9</sup> *sau*<sup>2</sup> も、福寿 *Fuk*<sup>7</sup> *sau*<sup>6</sup> に音が似て縁起よく、天厨味精のように商標に採用した例もある。

反対に吊鐘や時計を意味する鐘 *zung*<sup>1</sup> は、臨終を意味する終と同音であるため、時計を贈るのは、相手によつては不興を買う。なお寿銭と印刷した封筒は祝儀袋でなく、不祝儀袋である。死者に着せる衣服も寿衣と称する。従つて、寿 *sau*<sup>6</sup> は、吉字でなく、逆に不吉である。もう一例だけ挙げると、祭礼の日に物を落したりこわしたりすると、これは凶兆とされるが、この時、水上人の間では碎々瓶となえることで平癒される。碎 *sey*<sup>3</sup> は歳と、瓶 *ping*<sup>4</sup> は平と同音なので、歳々平(安)の吉辞に転化させるためである。

中国語は単音節のことばであるから、音節の数が限られてくる。そこで、ぼう大な漢字を、高低アクセントすなわち声調、ならびに復音節化によつて区別している。それにしても同音字による混乱が避けがたいところに、掛けことばが生まれてくる温床がある。右にあげた諸例は、著者の日常生活で経験した範囲を出ないものであるから、実際上ではもつと豊富に行われていることであろう。中国人の生活に根を下ろした掛けことばが、宗教思想の一部を規制している事實は、見逃すことができない。最近の新聞報道によると、香港から大陸へ墓参した老婦人が、国境通過の際、香燭と元宝類を没収されたという。旧態依然ということばはあてはまらないが、文化大革命以後において、ある意味で香港は「失われた中国」としての立場をいよいよ鮮明にしていることは誤りではない。

残神については、たとえば雷公、電母をあげることができる。季節はずれの雷は、雹と同じく政変とか、天変地異との前兆と考えられている。一九六七年二月には香港に降雹があり、政変がしきりに噂されたことがある。しかし、一般的にいつて、雷公は慈善神に富んだ神であり、雨との関係において、豊作を助ける神として知られている。ただし、例えば米を床にこぼしたり、米を足で踏んだりして、雷公の怒りを誘発すると、落雷して人を懲罰するのである。この際、稲妻によつて落雷の目標を確かめさせるのが電母だといわれている。雷公について、ブルクハルド氏は、香港の一習俗を記している。ブルクハルド氏によると、雷公は死者の罪業を罰するために、死者に落雷すると信じられている。このため、埋葬前の棺は、雷鳴や稲妻の時、急いで草か藁でおおいかくし、乾草の山に見せかけるのだという。<sup>(2)</sup>

次に華南のみならず湿潤アジアの研究上で紹介に価するのは、肉体の死とそれにとまなう靈魂の推移に関する觀念である。祖先崇拜の觀念が厚いことは中国の一般的パターンを離れないものであるが、これに関連して遺骨尊重の觀念が強く、屍体を洗骨することによつて、死者の靈魂がはじめて安定状態に入るとするのは、華南特有のことと思われる。洗骨というのは、屍体を第一次墓に仮埋葬し、屍体の軟部を腐朽させたのち発掘し、骨髄を集めて甕に納め、第二次墓地に本埋葬することである。

中国大陸で洗骨が古くから行われたことは確かであるが、ただこれは非漢民族の風習として一般に理解されている。文献上では、凌純声教授の挙げた『後漢書』卷一一五、列伝第七五、東夷が初見であり、今日の吉林省から韓国東北部にひろがっていた東沃沮は、「死者をまず仮埋葬し、皮肉をくちさせてから骨をとり、椁中に置く」と、記録されている。他は香港大学東方文化研究院饒宗頤氏の教示によるものだが、『隋書』三二、志第二六に、南郡、襄陽の非漢民族に関して左の記述がある。

其死喪之紀、雖無被髮袒踊、亦知号叫哭泣。始死即出屍於中庭不留室内、斂畢送至山中。以十三年為限、先拈吉日、

改入小棺。謂之拾骨。拾骨必須女壻、蛮重女壻、故以委之。拾骨者除肉取骨、棄小取大。当葬之夕、女壻或三数十人、集会於宗長之宅、著芒心接籬、名曰茅綏。

以来文献上に洗骨の風習が散見できる。これに関して凌教授の集成した文献は、一部再検討する必要はあるにしても、洗骨の著しい傾向として中国大陸の東北部、揚子江中、上流と嶺南に濃く分布し、かつその担い手が非漢民族であることは疑いない。

しかるに、文献研究にたいし、人類学分野の現地調査は、中国人の間にも洗骨の風習を見出している。たとえば金関博士による台湾中国人の洗骨調査、凌教授による同様の調査である。台湾と福建省東部は、明らかに洗骨の風習を有しているほか、凌教授によると、江蘇省の揚子江口にも同じ風習が存する。<sup>(3)</sup>さらに香港を含めて、広東省が挙げられるのである。正確には、同地の広東人、福建人ならびに客家である。

がらうい中国人間では異郷で死亡したばあいでも、屍骸や遺骨を極力故山に送り、宗族の墳墓に葬るのが伝統的通念である。祖霊を厚く祀ることによつて、この世の宗族が守護され、富貴と繁栄とが約束されると信じられたためである。広州の「快艇」というのは、故郷へ棺を運ぶ専用船のことであり、民国二十一年の広州市公安局調査では一六艘あり、すべて蛋民の経営にかかつていた。偶然の一致と思うが、快艇の呼称が、湿潤アジアの銅鼓図様にみえ、死者の靈魂を運ぶ軽快な舟と類似するのは面白く感じられる。海外の華僑もまた同様であり、香港は華僑の遺骸が中国大陸へ帰る通過地であった関係上、香港島の沙湾に、東華三院義荘とよぶ棺の保管施設があつた。L・ミッチソン女史のいうように、引取りと積みかえが順調にいかない棺が、一時的に保存されたのである。<sup>(4)</sup>

一九四七年以前における香港では、葬儀を行うだけに止め、遺骸を大陸へ埋葬する伝統的パターンに追従する広東人がすくなくなかつた。香港は彼等にとつて出稼ぎ場の一つにすぎず、一時的に居住し企業を起しても、永住する場ではな

く、別に故郷をもつていたからである。ところが一九四八〜九年内戦は、死者埋葬の伝統的パターンに重大な影響を与え、更に五二年に本省人の香港・大陸間自由往来が廃棄されたことで決定的打撃を蒙り、大陸への遺骸埋葬は、事実上行われなくなつた。これに対処して、政府では新界に公共墓地を経営している。市街地の私立墓地は権利が高く、容易に求めがたいからである。

広東語の墳墓、穴山は、どちらも、墓一般を指すことばであり、第一次墓（葬り墓）と第二次墓（祀り墓）の区別をすることははない。また墓参することを広東語では拜山という。但し書きことばは、掃墓である。拜山は、清明節と重陽節すなわち夏曆九月九日に行われるが、後者は高い所に上つて悪霊を払うのが主眼であり、多くのばあい墓地が山上に所在することから、墓詣でと結びついたものである。従つて掃墓は清明節に行うのが本筋である。厳密にいうと、清明節の約二週間前に春社があり、各々の家で前年死去した人を祀るが、この習慣は失われつつある。

清明節は冬至から一〇五日目であり、だいたい陽曆四月五日か六日にあたる。華北と同じく、柳の一枝を戸口に挿す。清明柳とよぶが、華北で悪霊あるいは蝎の毒を避ける効果があると信じられるのに対し、香港では他家の霊が誤つて入つてこない呪いとされている。別に香港では、柳の一枝を丸くためて、行燈の先端につけたものが葬列の先頭にみられる。これは死者の霊が、その柳に宿ると信じられているからである。柳と死霊が関係づけられることは、ヨーロッパにおいて、柳を悲嘆の標章とする習慣に似ていて興味深い。

ともあれ、墓地に線香、蠟燭、鮮花、果実、豚が奉げられ、陰司紙（冥錢）、金銀、元宝、紙製の帽子や衣服が焼かれる。ことに紙のズボンはその広東音である褲<sup>tu</sup>が富と同音であることから熱心に焼かれる。金銀、元宝というのは、いづれも供養に用いられる冥錢の一種である。中国人の祖先崇拜は、前述したように、きわめて現実的な理由に発しているので、富貴に関することが歓迎されるのであろう。こうした祀りはすべて第二次墓地で行われ、第一次墓地は省りみられ

ない。第一次墓地で行われるのは、犠牲の鶏血をふくむ埋葬の儀式だけであり、以後は放置される。

第一次墓に埋葬後、死者の年令や姓別に関係なく、三年ないし七年経てから、屍体は発掘され、洗骨される。ただウィルソン氏によると、死者が生きていると仮定して五一年目、六一年目、七一年目に相当する年は避けられる。<sup>(5)</sup>しかし洗骨にはかなりの出費を要するため、明らかに遺族の経済状態によつて決定されているようである。習慣より現実の生活が優先するのである。また政府からそのつど借用する公共墓地では五年が法定年限であり、五年過ぎると、遺族は半年以内に洗骨を行い、墓地を返還することが義務づけられている。

日どりについても一定せず、周年行われるが、本来は清明節前後に行うものである。ただし男子家長の誕生日に行うことは忌まれる。清明節になぜ掃墓、洗骨を行うのかは不明である。清明節は万物が新たに芽生える時期をマークする年中行事であつたと想像できる。松本信広教授によると、中国大陆では、広東、広西と交趾地方の境にあつた烏滸や、雲南、ビルマ方面に居住するワ族、ラフ族が、春の農耕祭のために人を殺す風習をもつていた。また屍体から穀物を生ずるといふ觀念が各地にあることを想うと、清明節に死者を復活させ、洗骨することは肯けないことではない。しかし、この種の考察を進めるほど、今日の華南研究は進歩していない。

洗骨の日は、家族そろつて第一次墓地へ赴くが、妊婦はこの義務をまぬがれる。しかし、実際に洗骨を行うのは、杵作工とよぶ職業的骨拾いであつて、遺族はこれに参加し、監督するだけである。杵作は、宋代におかれた役名であり、がんらい検屍官を意味することばであつた。洗骨を遺族自ら行わないのは、広東人の死穢に対する心的態度に関係があると思われる。死穢の怖れは、ウィルソン氏によると「死人風」の関係だといひ、死者のあらゆる不幸が移ると信じられているからである。その一例として、死の直前にある漁者が、船から墓地近くの特異な死小屋へ移される大澳の習俗をあげている。大澳は香港最大の島嶼である大嶼山西南の漁村である。死小屋の習俗が事実かどうか、まだ確めえないが、一般に広

東人が屍体を保持することを嫌い、死後すぐに搬出して永別亭に隔離するのは確かである。死穢をおそれる一般人に、それをおそれぬ柩作工が介在して安定をえているものと思われる。柩作工を統括しているのは、棺づくりと葬儀社である。洗骨日の撰定も彼等が曆によつて行ふなど、儀式の慣習が特殊な職業人によつて伝承されているのは注意してよい。

洗骨に先立つ祀りは簡単であり、線香、蠟燭、鮮花を奉げ、往生神呪という呪符や、紅錢という紅色の紙を焼いて礼拝する。爆竹を鳴らし、周圍の邪鬼を追い、死者を睡りからさましたあと、柩作工が封土を除き、棺の上蓋を開く。次いで細心の注意をもつて骨集めが行われる。ブルクハルド氏によると、この際、故人の孫もしくは後継者が頭骨を保持するというが、<sup>(6)</sup>筆者の見聞したかぎりでは、遺族はなんら関与しない。取りあげられた骨は第二次墓地の祭壇に移されてきよめられるが、第一次墓地は頭髮などをそのまま残して放棄される。公共墓地のばあい、第二次墓地へ移す前に、骨をいったん殯儀館の晒骨場へ移して、露天できよめる。とくに腐肉の付着がひどい骨は、途中の沼で、土砂による消磨と水洗が行われる。晒骨場での処理は、鑪掛け、尖頭具処理、水洗、アルコール洗滌である。終つて、晒骨場の棚で陽光にさらされる。かくして、最終的には、金塔とよぶ樽型陶器に納骨される。

金塔は褐色もしくは緑色をしており、一部にいわれるような金色のものはない。高さ二二インチ、口径一〇インチ、最大周囲五二インチあり、蓋つきで、すべて大陸からの移入品である。納骨の状態は、蹲踞位といってよい。膝を立て、手を折つて腰をおろしてうずくまつた姿勢に骨を組みあげるのである。その順序は、

一、まず骨盤（寛骨、仙椎骨、尾椎骨）を金塔後壁にもたせかけ、その上に腰椎骨を建てる。腰椎骨の左右に、それぞれ胸椎骨と頸椎骨を置く（以上A群）。

二、A群の尾椎骨上に、肩甲骨、肋骨、鎖骨、胸骨を積み上げる。各々、右半身の骨が上面である（B群）。

三、B群上に、上下顎骨、頭骨を置く。その左右に四肢骨を配置するが、その順序は、内側から、脛骨、大腿骨、腓骨、



第四図 客家の第二次墓地と金塔（新界，1966）

尺骨、橈骨、上腕骨の順である。なおこの際に顎骨の歯も納められる。

四、最後に、足根骨、膝蓋骨、中足骨、指骨や、手根骨、中手骨、手の指骨などが一括される。副葬品は皆無である。

以上の発掘から晒骨、納骨に至る全過程は約半日を要し、広東語では洗骨といわずに、執金と称している。そして幼児を除き、性別、平常の死や業死などに関係なく行う。杵作りに支払われる執金の手数料は、公共墓地で、金塔の代価をふくめ邦貨五千円位である。

納骨した金塔を埋葬する所が、第二次墓地である。第二次墓地は、山墳とよばれる馬蹄形、コンクリートないし石造墓が正式のものである。山墳を背にして立つと、半円形の平坦な祭壇があり、祭壇の奥に、祀られた人の姓名や死亡年月を記録した碑面がある。碑面のすぐ前にあたる個所の祭壇下に、金塔が格納される。山墳は一〇フィート以上離れた背後か両側に小さな祠（后土）があつて守護されることがある。故人が宗族中の重要人物であるばあいによく、土地公にその墓を守護してもらうのが目的である。

山墳の築造はかなりの経費を要する。そこで金塔を直立させておくだけにとどめ、特別の施設や区画を持たぬことが多い。この際、地上に置く陽葬と、地下に埋葬する陰葬の別がある。粉嶺のゴルフ場付近、錦田の奥地、北大刀岾山の東北界の山頂、山腹、山麓の荒蕪地をすこし注意すると、たいいていの所に金塔がある(第四図)。陽葬なら毎年骨を点検し骨が虫ばまれているか、蛇が入りこんでいないかどうか確認できる。ただ陽葬の金塔も、久しくたてば陰葬に付される。

始祖もしくは重要な祖先が中央にすえられ、その左右に子孫の金塔が置かれている。蓋はこわれやすいとみえ、こわれた甕の底部を覆蓋に転用した例や、もよりの甕を転用して、ちようどわが国北九州の弥生式合口甕棺を思わせるものがあるが、特別の意味はない。また金塔の蓋上には、紙の呪符が石で押えられていることが多い。管見にぞくした限りでは、紅銭、長貴人、緑馬であつて、いづれも広い意味での冥銭である。紅銭は紅紙に大小さまざまな金紙を貼つたものであり、長貴人は人面と孔あき銭のパターンを連続的に刻んだ細長く赤い紙、また緑馬というのは、孔あき銭を刻んだ細長い緑色の紙である。



第五図 杵作工の執金 (1967)

なお金塔を置いたり、山墳を築造する場所の縄張りには、がんらい地師が風水によつて決定する。金塔にすべきか山墳に祀るか、金塔なら陰陽いづれをとるかも、地師が決めるのである。第二次墓地は、竜、蛇、蝦、蟹などの形を表わす山の背か、それとも山嘴であることが多い。高いだけでなく、前面に流水を含む広い展望が開け、しかも左手に緑竜をふくむ長い山脈、右



手に白虎をふくむ短かい山脈で展望が構成される必要がある。風水をみたててもらうには余分の出費を必要とすることや、香港という限られた土地の中で理想的な風水が得られないため、香港では次第に風水の観念が後退している。

地師の衰退に比較して、各種の迷信にあづかる南巫はまだ相当多いようであるが、その実態は未確認である。最後に、迷信も含めて、香港中国人の宗教思想を知るためには、各所に営業している香燭店、紙料店の調査が有効であることを記する。

註

(1) The Chinese Temples Ordinance 1928 によると、

廟、寺、道院、庵の区別を設けている。一九五八年六月現在華民政務署の調査では、新界に廟一〇六、寺と庵二〇八、観(道院の別称)三、合計三二七が確認されている。廟のうち、主要なものは

天后廟四六、洪聖宮一四、觀音廟五、候王廟五、北帝廟四、関帝廟四、(以上小計七八)

である。また香港、九竜では、政府にコントロールされる廟は二八あり、その内訳は

天后廟八、觀音廟五、北帝廟四、譚公廟二、洪聖廟一、福徳祠一、その他七

となっているが、この他東華三院関係と個人の廟が多数あることが見込まれる。廟をはじめ伝統的概念が中国人の現代生活において果す役割については、トプレイ女史、ヘイズ氏、

バーネット氏など R A S 香港支部の会員が着実な仕事を進め  
らる。

(2) V. R. Burkhardt, Chinese Creeds and Customs, Vol. 1, 14th Impression, p. 176, Hong Kong 1966.

(3) Ling Shun-Shen, The bone-washing burial custom and ancestral bone worship in Southeast Asia. Annals of Academia Sinica, No. 2, Part 1, 1955.

(4) Lois Mitchison, The Overseas Chinese. pp. 9~10, London (The Bodley Head Ltd.) 1961.

(5) B. D. Wilson, Chinese Burial Customs in Hong Kong, Jour. of Hong Kong branch of the Royal Asiatic Society, Vol. 1, 1961.

(6) V. R. Burkhardt, Chinese Creeds and Customs, Vol. 2, 6th edition, p. 135, 1960.

(7) V. R. Burkhardt, Chinese Creeds and Customs, Vol. 2, 6th edition, p. 135, 1960.